

道尾秀介

shusuke michio

カフスの親指の

by rule of
CROW'S thumb

講談社文庫





講談社文庫

常州大学図書館

蔵カヲ女ノ親蔵
by rule of CROW's thumb

道尾秀介

講談社

著者 | 道尾秀介 1975年生まれ。2004年『背の眼』で第5回ホラーサスペンス大賞特別賞を受賞しデビュー。'07年『シャドウ』で第7回本格ミステリ大賞を受賞。'09年本作で第62回日本推理作家協会賞・長編及び連作短編集部門を受賞。'10年『龍神の雨』で第12回大藪春彦賞、『光媒の花』で第23回山本周五郎賞を受賞。'11年『月と蟹』で第144回直木賞を受賞。『向日葵の咲かない夏』『骸の爪』『片眼の猿』『ソロモンの犬』『ラットマン』『鬼の^{あしおと}足音』『花と流れ星』『球体の蛇』『月の恋人』のほか、エッセイ集『プロムナード』など著書多数。

おやゆび
カラスの親指 by rule of CROW's thumb

みち おしゅうすけ
道尾秀介

© Shusuke Michio 2011

2011年7月15日第1刷発行

2011年12月5日第5刷発行

発行者——鈴木 哲

発行所——株式会社 講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112-8001

電話 出版部 (03) 5395-3510

販売部 (03) 5395-5817

業務部 (03) 5395-3615

Printed in Japan



講談社文庫

定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義

本文データ制作——講談社デジタル製作部

印刷——凸版印刷株式会社

製本——株式会社千曲堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-276977-8

目次

HERON / hérən	007
BULLFINCH / búlfin(t)ʃ	067
CUCKOO / kú:ku:	125
STARLING / stá:(r)liŋ	207
ALBATROSS / ælbətrəs	297
CROW / króu	457
解説 市川真人	502



講談社文庫

カラスの親指

by rule of CROW's thumb

道尾秀介

講談社

目次

HERON / hérən	007
BULLFINCH / búlfin(t)ʃ	067
CUCKOO / kú:ku:	125
STARLING / stá:(r)liŋ	207
ALBATROSS / ælbətrəs	297
CROW / króu	457
解説 市川真人	502

It's heads I win and tails you lose.

表が出ればぼくの勝ち、裏が出れば君の負け。

——コナン・ドイル『緋色の研究』

HERON / hérən

(一)

足の小指を硬いものにぶつけると、とんでもなく痛い。その痛みに脳髓がびっくりして、「！」と仕事の手を止めてしまうのか、意識が一瞬遠のきさえする。しかしじつは、この手の事故の最悪な側面は、痛みそのものでもなければ意識が遠のくことでもない。何といっても自分が非常に間抜けに思えてしまうことなのだ。

山手通りに面した『共和銀行品川支店』の前で、じつと腕を組み、まばらに出入りする客たちを見据えながら、四十六歳の武沢^{たけざわ}竹夫^{たけお}は今朝方の失敗を思い出していた。アパートの鏡に向かって丁寧に髭^{ひげ}をあたり、今日のスーツに合うネクタイを選ぶため洗面所を出ようとしたその瞬間、右足の小指を5kgのダンベルに思いっきり激突させてしまったのだ。

そのダンベルは、つい先日ホームセンターで購入してきたセール品だった。洗面所

に入るときは床に置かれたその二千九百八十円（税込）のダンベルの存在をちゃんと確認し、またぎ越していた。しかし、鏡を見つめて電気髭剃りを上げ下げ下げしているうちに、すっかりその存在を忘れてしまっていたのだ。痛みはもうとつくに退いていくが、そのときの間抜け感というか、あの空疎な悔しさが、いまだに武沢の胸に残っていた。

これはよくない。仕事の成功率に影響する可能性がある。この仕事は何より「自信」が肝要なのだ。

俺は間抜けじゃない。俺は間抜けじゃない。俺は間抜けじゃない——ごく小さな声でつづけざまに呟きながら、武沢は銀行に視線を戻す。ちょうど、小肥りの中年男性が出納窓口を離れてガラス張りのスウィングドアへと向かってくるところだった。

筑紫章介、四十三歳。住所は荒川区で電話番号は3802-XXXX。有名なキャスターと同じ名字だが、頭にあるのは美しい銀髪などではなく縮れた黒髪で、しかも上のほうから禿げてきている。春の陽を受けたその薄毛頭を真っ直ぐに見据えながら、武沢は革靴の持ち手を握り直した。俺は間抜けじゃない、俺は間抜けじゃない、俺は間抜けじゃない——ゆっくりと近づいていく。相手の身長は武沢とちよぼちよぼといったところか。

「筑紫様……筑紫様」

静かに声をかけると、筑紫章介は立ち止まって振り返り、訊ねるような顔で武沢を見た。

「筑紫様、恐れ入ります。ちよつとよろしいでしょうか？」

忘れた相手を思い出そうとするように、筑紫章介は小さな目を何度かしばたたく。しかし彼が武沢の顔を知っているはずもない。なにしろ初対面なのだ。

「突然すみません。私、^{わたくし}こういう者なのですが」

武沢は濃紺のスーツの内ポケットから名刺を取り出して渡した。筑紫章介はそれを顔の前に持つてきて、しげしげと眺める。

「銀行検査官……」

「こちらの、共和銀行さんからのご依頼で、現在ある詐欺事件について調べているところなんです。じつは筑紫様に少々、ご協力願いたいことがございました」

「協力？……でもあの、おたくどうして僕の名前を？」

その疑問はもつともだ。武沢は説明する。

「中にいる支店長さんから、いま連絡があつたんです。——筑紫様、先ほど出納窓口で、現金をお受け取りになりましたよね」

「ええ、会社の金を」

「三つ並んでいるうちの、一番左の窓口」

「そうです」

「窓口の担当は、三十代半ばの男性でしたか？」

「はあ、そんな人でした」

「シルバーフレームの眼鏡めがねをかけていた？」

「かけてました」

武沢は相手に顔を寄せて声を低めた。

「お受け取りになった現金を、検めあらたさせていただいてもよろしいですか？」

「は？」

武沢は筑紫章介が片手に提げた黒いバッグを目線で示し、単刀直入に言う。

「偽札の可能性があるんです。——ニュースなどでも取り上げられているのでご存知かもしれません、この四月に入って二度、品川区内で精巧な偽札が発見されています。所轄署と当方で調査した結果、それらの偽札の出所はいずれもこの銀行でした。しかも、ある出納窓口の担当者が、直接手渡した現金だったんですよ」

「……どういふことなんです？」

「すり替えていたんです、窓口の担当者が。デイスペンサーから出した現金を着服して、客には偽札を渡していたんです。印刷工場をやっている知人と二人でつくった、精巧な偽札を」

筑紫章介は自分の手にしたバッグに目をやった。

「え、これ……偽札？」

いえ、と武沢は小さく首を横に振る。

「まだそうと決まったわけではありません。ですから筑紫様にご協力をいただいて、こちらで調べさせていただきたいのです」

武沢は物欲しそうに見えないよう十分注意しながら——かといって、あまりのんびりした雰囲気にならないよう気をつけながら、相手に向かって右手を差し出した。筑紫章介は武沢の右手と自分のバッグとを交互に見やり、口の中で何か呟く。——早くしろ。早く。早く。しかし相手は眉根を寄せたまま、まだ思案している。武沢は片手でゆつくりと頭の後ろを撫でた。

黒い影が、ぬつと地面に伸びてきたのはその直後だった。

「何か、問題でも？」

スーツ姿の男が二人の横に立っていた。硬い表情に銀縁眼鏡をかけ、髪を実直そうに撫でつけて、胸には四角いネームプレートをつけている。そのネームプレートに刻まれた文字は——。

『共和銀行品川支店』

支店長補佐

石霞英吾いしがすみえいご

くそっ——武沢は内心で悪態をついていた。その感情を顔色に出さないよう注意しつつ、穏やかに相手に向き直る。

「いえ、大丈夫です。何も問題ありません」

「本当ですか？」

「本当です」

戸惑うように武沢たちの様子を眺めていた筑紫章介が、上目遣いに支店長補佐のネームプレートを見ながらおずおずと口をひらいた。

「あの……いまこの人がですね、僕の持っている現金を調べるとか何とか言ってきたんです。それで僕、どうしようかと思って……」

ネームプレートの男は、上唇の突き出た、どこかイルカみたいな口から「あ」と声を洩らし、筑紫章介と武沢の顔を素早く見比べた。

「もしかして、うちの支店長が依頼した例の件？」

武沢はうなずいた。

「そうです、例の件です」

「すると、こちらのお客様がお持ちになっている現金は、あの窓口で受け取られたものなんですか？」

「ええ、たつたいまね」

「それでしたら、私がお預かりします。店内で札を検査機にかけて、すぐに確認してまいりますので」

ようやく筑紫章介は納得してくれたらしく、「はは」と照れくさそうに薄毛ちりちり頭を撫で上げた。

「なんだ、ほんとだったのか」

「突然のことで、驚かれましたでしょう」

ネームプレートの男は申し訳なさそうに肩をすぼめる。

「このようなことでお客様にご迷惑をおかけして、我々もお恥ずかしいかぎりです。

——そういうわけなので、恐れ入りますが、ここで少々お待ちいただけますか？ お

引き出しになった現金をお預かりして、確認が済み次第、戻ってまいりますので。もちろん店内でお待ちいただいても構いませんが」

「あ、じゃあ中で待ってます」

「そうですか。では、現金のほうをよろしいですか？」

「中で渡しますよ。ここじゃあれだから」

「了解いたしました」

店内で待っていると言つて、ネームプレートの男は銀行に戻っていった。